

委託事業実施内容報告書

平成23年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【日本語教室の設置運営】

受託団体名 特定非営利活動法人 難民支援協会

1. 事業の趣旨・目的

クルド難民の女性たちの多くは、母国で教育の機会がなく、また、日本においても文化的理由などから専ら家事労働等に従事し、積極的に外部との交流がしづらい状況にある。本事業では、彼女たちのニーズや日本語レベル、環境にあわせた日本語教室を設定し、生活に密着した日本語の習得を図るとともに、学習の過程を通じ、日本語学習や日本社会とのコミュニケーションへの意欲を高めることを目的とする。

また、彼女たちの多くは子どもを持つ母親である。生活に必要な最低限の日本語の習得もままならないために、地域コミュニティへの参加および学校に通うことができず孤立しているクルド難民の母親や児童生徒が、地域支援者や学校教員が用いるやさしい日本語を理解・習得することで、地域支援の枠組みに入れるようにすることを目的とする。

2. 運営委員会の開催について

【概要】

開催日時	開催場所	出席者	議題	会議の概要
5月9日	難民支援協会事務所	増田麻美子 根本愛子 大塚英二 萩原梨沙	対象者に関する基礎情報の共有と今後の実施方法の確認	・参加者に関する基礎情報を共有した。 ・参加者の日本語レベルを把握した上で、ボランティアの増加とニーズ調査を行う。
10月25日	難民支援協会事務所	増田麻美子 根本愛子 鹿島美穂子 萩原梨沙	これまでの振り返り 今後のスケジュール確認	・参加者の増減への対応の確認。特に、参加が低下している人には、個別に連絡をする。 ・参加意欲を高めることを目的に、テストを行い、現状までのがんばりを評価する。最終回には修了証を配布する。
3月25日	蕨市民会館	増田麻美子 根本愛子	1年間の振り返りと明らかとなった	・日本語への興味、学習への意欲の高まりが最大の成果。

		鹿島美穂子 鶴木由美子	課題について	・さらに、日本文化の受け入れも見られた。 ・日常生活での使用、特に会話の頻度を高められなかったことが課題。 ・今後は、日本語講師資格を持つボランティアの活用、自学教材の提供、学習方法の紹介などを行いたい。
--	--	----------------	--------	--

【写真】



3. 日本語教室の開催について

- (1) 講座名 クルド難民女性のための日本語教室
- (2) 開催場所 埼玉県蕨市蕨市民会館、川口市芝市民ホール
- (3) 学習目標
 - ・日本語の文字(ひらがな)の読み書きができるようになる
 - ・日常会話の学習を行い、日本語での会話に慣れる
- (4) 使用した教材・リソース
 - ・トルコ語語彙(さぼうと 21)
 - ・「かなマスター」 アークアカデミー著、三修社
 - ・「にほんごこれだけ！ 1」 庵功雄著、ココ出版
 - ・会話シート
- (5) 受講者の募集方法

団体の支援対象者であるクルド難民女性に対して、ちらしの配布および口頭（電話等）にて募集を行った。その後、難民女性どおしの口コミにより参加した人も見られた。

(6) 受講者の総数 28 人

(出身・国籍別内訳 トルコ・クルド民族 28 人)

(7) 開催時間数(回数) 60 時間 (全 24 回)

(8) 日本語教室の具体的内容

回	開催日時	時間数	受講者数	国籍・母語(人)	教授者・補助者人数	内容
①	4月24日 13-14:30	1.5時間	10人	トルコ・クルド語(10人)	教授者1人 補助者1人	スケジュールの言い方
②	5月22日 13-14:30	1.5時間	18人	トルコ・クルド語(18人)	教授者1人 補助者1人	色やデザインの言葉
③	6月2日 10-14:30 (休憩1時間 含む/以下同様)	3.5時間	16人	トルコ・クルド語(16人)	教授者1人 補助者1人	文字指導(た行)、文型指導、 会話練習
④	6月19日 13-14:30	1.5時間	18人	トルコ・クルド語(18人)	教授者1人 補助者1人	学校の言葉
⑤	6月30日 10-14:30	3.5時間	16人	トルコ・クルド語(16人)	教授者1人 補助者1人	文字指導(は行)、文型指導、 会話練習
⑥	7月25日 10-14:30	3.5時間	10人	トルコ・クルド語(10人)	教授者1人 補助者1人	文字指導(ま、や行)、文型指導、 会話練習
⑦	8月7日 13-14:30	1.5時間	18人	トルコ・クルド語(18人)	教授者1人 補助者1人	子どもの様子を伝える
⑧	8月18日 10-14:30	3.5時間	10人	トルコ・クルド語(10人)	教授者1人 補助者1人	文字指導(50音の確認)、文型指導、 会話練習
⑨	8月28日 13-14:30	1.5時間	16人	トルコ・クルド語(16人)	教授者1人 補助者1人	部屋の中の言葉
⑩	9月2日 10-14:30	3.5時間	6人	トルコ・クルド語(6人)	教授者1人 補助者1人	文字指導(ディクテーション)、 文型指導、会話練習
⑪	9月15日 10-14:30	3.5時間	6人	トルコ・クルド語(6人)	教授者1人 補助者1人	文字指導(ア、カ行)、文型指導、 会話練習
⑫	9月25日 13-14:30	1.5時間	13人	トルコ・クルド語(13人)	教授者1人 補助者1人	家の中の言葉

⑬	10月20日 10-14:30	3.5時間	7人	トルコ・クルド語 (7人)	教授者1人 補助者1人	文字指導 (サ、タ行)、文型指導、会話練習
⑭	10月30日 13-14:30	1.5時間	13人	トルコ・クルド語 (13人)	教授者1人 補助者1人	緊急時の日本語
⑮	11月20日 13-14:30	1.5時間	11人	トルコ・クルド語 (11人)	教授者1人	病院の日本語
⑯	11月25日 10-14:30	3.5時間	8人	トルコ・クルド語 (8人)	教授者1人	文字指導 (カタカナ復習)、文型指導、会話練習
⑰	12月7日 10-14:30	3.5時間	11人	トルコ・クルド語 (11人)	教授者1人 補助者1人	文字指導 (ハ行)、文型指導、会話練習
⑱	12月18日 13-14:30	1.5時間	14人	トルコ・クルド語 (14人)	教授者1人 補助者1人	アチーブメントテスト
⑲	2月3日 10-14:30	3.5時間	11人	トルコ・クルド語 (11人)	教授者1人 補助者1人	文字指導 (マ、ヤ行)、文型指導、会話練習
⑳	2月5日 13-14:30	1.5時間	11人	トルコ・クルド語 (11人)	教授者1人 補助者1人	子どもの成長を伝える
21	2月19日 13-14:30	1.5時間	8人	トルコ・クルド語 (8人)	教授者1人 補助者1人	冠婚葬祭などの挨拶
22	2月24日 10-14:30	3.5時間	10人	トルコ・クルド語 (10人)	教授者1人 補助者1人	文字指導 (カタカナ単語練習)、文型指導、会話練習
23	3月16日 10-14:30	3.5時間	10人	トルコ・クルド語 (10人)	教授者1人 補助者1人	文字指導 (ひらがな、カタカナ復習)、文型指導、会話練習
24	3月25日 13-14:30	1.5時間	15人	トルコ・クルド語 (15人)	教授者1人 補助者1人	私の家族 (スピーチ)

(9) 特徴的な授業風景(2～3回分)

①6月2日(木) 参加者 16人

・指導項目:

1. 名詞述語文 ①～は…です / ②～は…じゃないです / ③は…でした / ④～は…じゃなかったです
2. これ / それ / あれ
3. ここ / そこ / あそこ
4. ～の… ①うちの近く ②わたしのかばん

・授業内容:

1. コース内容の確認

2. 文字指導 た・だ行
3. 文型指導 (指導項目参照)
4. 昼ごはん休憩
5. 文型復習/確認
6. おしゃべりタスク
7. まとめ

・学習者等からの声

- ひらがなは「読めるけれど書けない」ので書くことをもっとしたい
- 一文字一文字もいいが、単語の読み書きをしたい
- どうしたら勉強した文字を忘れないでいられるか→書いて覚えるようにするのがいい、日本の学校でもそのように指導している。一日一文字と決めて覚えるようにする旨を返答
- 子ども(赤ちゃん)がうるさい、せめて授業の邪魔にならないようにできないか
- 今回のような配布資料(ひらがなにトルコ文字で読み方をつける+トルコ語訳)があると、家でも復習できるからありがたい

・観察メモ

どの参加者も熱心に取り組んでいるように見え、アウトプット(文字を書く、自分で何かを口に出す等)ことをしたいようにみえた。

その一方で、トルコ語での指示もあまり聞いていない参加者もいた。「教師の指示を聞く」ということをしてこなかったかもしれない。もしくは、教師から直接指示を受けるのではなく、日本語ができる他の参加者(2人)を経由するのが習慣になってしまっているのかもしれない。「日本語ができる生徒がやってくれる、手助けしてくれる」と、依存しているような参加者もみられた。最後のタスクの場面で「隣にいてほしい」と依頼している参加者もいたため、できるだけ助けないう2人に指示を出した。

机の配置を「コの字型」にしたが、参加者との距離ができてしまうため、次回は前方に島を作るなどしたい。また、勉強に集中する環境づくり、安全性の点からも、できるだけ子どもは学習者と離しておきたい。

②8月18日(木) 参加者 10人

・指導項目:

ひらがな 単語書き方

動詞復習 ~ます/ました、疑問視復習、~から(理由)、動詞グループ分け

・授業内容

1. 文字指導 ①五十音表穴埋め ②単語読み方 ③単語書き方
2. 文型指導 ①既習単語復習(カード使用)
 - ②おしゃべりタスク 毎日のこと/きのうのこと
 - ③ ~から、…。

④ A:どうしてですか。B～から。

⑤ 新語導入

⑥ 動詞のグループ分け

・学習者からの声:日本語を使って話すことができて、よかった。

・観察メモ

今回は今までで一番うまく教室がまわった。考えられる要因としては、子どもが静かだったこと。学習者がクラスに集中でき、教師も声を張り上げることなく済んだ。ボランティアが子どもに取られず、ほとんどクラスについていることが可能となった。また、学習者に対してボランティアが多かったことで、ボランティア1人が2～3人を見ることができたのがよかった。

できる学生がたまたま遅刻となったが、彼女によるトルコ語での解説がなくても、「活動内容について日本語の指示+実際にやってみせる」だけで、ほとんどの参加者は対応可能であったことも発見であった。「意味がわからない」ということを言う人もおらず、新出語彙でも文型でも何も問題はなかった。ぱっと答える人がいなかったため、参加者に「考える時間」ができたこともよかったかもしれない。

③3月16日(金) 参加者10人

・指導項目:

ひらがな カタカナ 復習

普通体

・授業内容

- 1.ひらがな・カタカナ復習:絵を見てその名前を書くという復習をした。その際、使うのはひらがななのかカタカナなのかを考えて書いてもらった。
- 2.文の復習:動詞、イ形容詞、ナ形容詞、名詞、それぞれの文の復習(主に時制)をした。
- 3.普通体:動詞、イ形容詞、ナ形容詞、名詞、それぞれの文の丁寧体と普通体を確認。また、丁寧体を使うべき場面で普通体を使わないように意識する練習をした。

・観察メモ:

文字を書くことは、もう抵抗はないようで、集中して取り組んでいた。

参加者たちは「ひらがなもカタカナも読むことはあまり問題ないけれど、書くのが難しい」と話していた。様子を見ていても、耳から覚えているので正確に書くのは難しいのがわかる。また、「ひらがなとカタカナの使い分けがわからない」とも話していた。こちらについても、たびたび確認を求めていたので、理屈ではわかっている、実際には使い分けがまだまだ難しいのだろうと感じた。今まで何度も繰り返している単語(紅茶やシャツなど)も、「ひらがなカタカナかわからない」「正確に書けない」ことがほとんどなので、繰り返すことが必要だということを改めて感じた。それも、クラスだけではやはり足りない、自宅でも学習してもらえればと感じた。

普通体はあまり難しくなかったが、こちらも丁寧体との使い分けが難しいようだ。ただ、「使い分けるもの」という意識は出てきたように思える。

④3月25日(日) 参加者 15人

・最終スピーチの内容

「私は(名前 A)と申します。1年間お世話になりました。これからも一緒に勉強しましょう。みんな先生にありがとう。JARにありがとうございます。増田先生、根本先生、ありがとうございました。私も日本語の勉強がんばります。」

「私は(名前 B)と申します。1年間お世話になりました。おもしろく日本語を教えてくれてありがとうございました。これからも一緒にがんばりましょう。」

スピーチ原稿は、アルファベットやトルコ語、クルド語でもいいと伝えたが、一生懸命日本語で書いていた様子が印象的だった。また、前に立って発表することは、彼女たちの文化的背景を考えると非常に勇気のいることである。最初のころは、ほぼ全員が、声を出して反復したり、前に出て黒板に字を書くことが恥ずかしいと言っていたが、夏を過ぎたころから、積極性が飛躍的に向上した。途中から「(私たちは)日本に住んでいるのだから、もっと日本語をがんばって勉強しないといけない」などの発言が出るようになったことにも、意識の大きな変化が表れている。それも、講師への大きな信頼が醸成されたことが起因していると考えられる。修了証を受け取る参加者は、とても自信を持ち、晴れやかな表情をしていた。彼女たち見る子どもにも、よい影響につながると感じ、語学学習以外の面でも生活者として日本の環境に慣れていくことに大きくつながった事業になったと感じた。



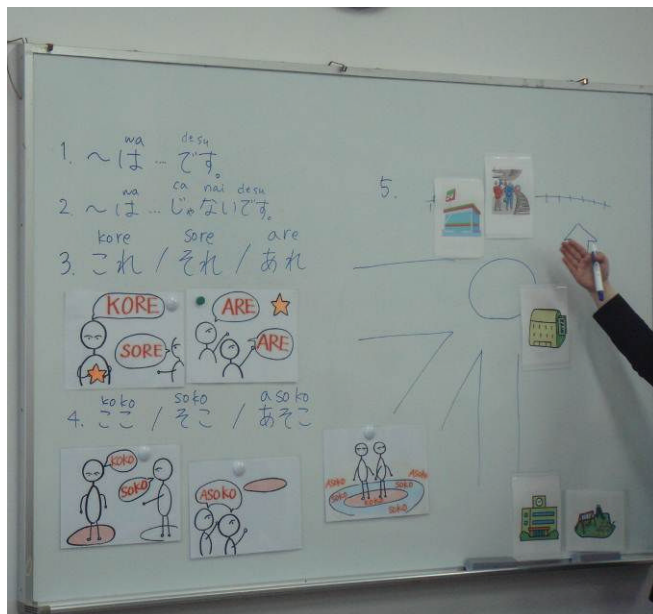
カタカナカードを使ってかるたゲームの要領で学習



小さい子どもを抱えながら勉強



絵などビジュアルに訴えるツールも使って指導



日本語教師から、ボランティアへの研修の様子



修了証の授与



最後のクラスにて(バナーの文字は子どもたちによるもの)



4. 事業に対する評価について

(1) 当初の学習目標の達成状況

- ・識字学習への意欲向上と文字、ひらがな、カタカナが習得された。当初からの参加者ほぼ全員がひらがな、カタカナを読み書けるようになっている。途中参加者も読むことができるようになり、文字学習への意欲が見られるようになった。
- ・口頭試験を実施し、日本で生活に必要な最低限の意志疎通が適う日本語でのコミュニケーション能力の達成が確認された。日本語で会話することへの抵抗および心理的な負担が軽減され、間違いを恐れずに会話が続けられるようになっている。

(2) 学習者の習得状況

- ・ひらがな・カタカナの読み書きの習得(ふりがながある文章であれば、何とか読める)
- ・日本語の文字体系、文法体系の理解(母語との相違を含む)
- ・やさしい日本語(初級前半程度)の習得
- ・日本人支援者との会話を通じた日本語でのコミュニケーションに対する慣れ

(3) 日本語教室設置運営の効果、成果

- ・孤立傾向にあったクルドの女性たちが自分たちのコミュニティを持ち、日本社会とのつながりを持つという意識を持ち始めたことにより、目標を持って学ぶことの楽しさや地域社会、学校と関わることに喜びや達成感を感じてくれるようになった。自分たちでノートやファイルを準備し、授業前に復習する姿が見られるようになったこと等は以前には考えられなかった大きな進歩と言える。また、日本の学校で学ぶ子どもたちに対しても、日本語を学ぶことにより教育に積極的に関わる姿勢を持ち始め、子どもの将来についての関心が高まったことも大きな成果と言える。その結果として、別途子どもへの幼児学習教室を開催することになった。

(4) 地域の関係者との連携による効果、成果 等

- ・地域の小中学校との連携は困難であり、定期的な地域住民の支援者を維持することも適わなかった。しかし、地域の幼稚園(蕨幼稚園)には就学前に準備しておくべきことや、子どもに対する接し方等の助言をいただき、地域に難民の母子が存在しており、教育支援が必要であるという認識を共有することができたことは、今後の受け容れの可能性も含めて進歩だったと言えるのではないかと。

(5) 改善点、今後の課題について

- ① 現状 : 日本語学習により日本で生活に対する不安や不満が徐々に解消され、日本社会との関わりの中で生きていくために日本語学習の必要性を実感しつつある。また、日本語がわかるようになってきているという喜び、実感がさらなる学習動機に繋がっており、学びを通じたコミュニティも形成されつつある。また、特に子どもの教育については熱心で、学校の先生や地域の機関と関わる場面での日本語へのニーズは増していると感じる。
- ② 今後の課題: 回を重ねる度、当初の想定よりも多くの参加者が集まり、レベル設定が必要となった。それに伴い、支援者の数を確保すること、適当な場所を維持確保するのが難し

くなっている。

③ 今後の活動予定・展望:クルド女性コミュニティーの中に日本語熟達度が高い者が存在する。そのクルドの方に日本語支援の入門をお手伝いいただけるように次回講座では養成しながら日本語教室を運営したい。また、地域の支援者ならびに学校関係者に対する働きかけを強め、学校からのお知らせへのふりがなの付与、あるいは「やさしい日本語」でコミュニケーションをすることの有効性などを協働の中で意識付けを図りたい。対象者の日本語や教育の水準がもともと非常に低いこともあり、1年間で達成できる語学習得のゴールはまだまだ限定的であるが、意欲や熱意の高まりは非常に大きな成果である。そのような状態に達した今、今後も継続して学習できる機会が必要とされている。